

パキスタンにおける女性・少女に対する虐待

ジャワリア・カシフ（パキスタン）

パキスタンでは、女性や少女たちが非人道的な扱いを受けています。レイプ、アシッド・アタック（酸攻撃：硫酸・塩酸・硝酸など劇物としての酸を他者の顔や頭部などにかけて火傷を負わせ、顔面や身体を損壊にいたらしめる行為を指す）、ドメスティック・バイオレンス(DV)、セクシャル・ハラスメント、職場での嫌がらせ、公共の場における不安感、強制結婚、名誉殺人などをはじめとする、女性や少女を狙った数多くの犯罪が、現在もこの国で起きています。

パキスタンでは、少女が自ら選んだ相手と結婚することを家族が認めないケースがほとんどで、それでも家族の意に背いて結婚すると、一家に不名誉をもたらしたとされます。その場合、家族の合意に基づいて、「名誉」の名のもとに少女を殺害したり、生きたまま火をつけるなどの事件が後を絶ちません。「パンチャーヤト」や「ジルガ」と呼ばれる伝統的な村の長老者会議が、名誉殺人を決定し命じる例も少なくありません。パキスタンで最近起きたケースとして知られているのが、サナ・チーマさんの殺害です。（パキスタン出身の 26 歳のイタリア人女性、サナ・チーマさんは イタリアで結婚することを望んでいましたが、これに反対した父親と家族によって絞殺され、遺体が埋められ、父親、兄弟、叔父が逮捕されました。）

パキスタンでは多くの女性や少女たちが DV の危険に晒されています。彼女たちは DV の被害を受けても、沈黙したままです。その原因は育った環境にあります。家族の男性から虐待を受けても問題ではない、と幼い時から叩きこまれてきたため、事態が表面化することはありません。女の子の幸せよりも、家族の名誉の方が重要だと考えられているのです。女性や少女たちは家族、特に夫に虐待されても、沈黙を守らなくてはならないという義務を背負っています。DV の被害を裁判に持ち込む女性の割合は、0.4%にも満たないのが現状です。その他にも、彼女たちの沈黙の背景にはさまざまな理由が存在します。具体的には、家庭内で男性に経済的に依存している、自分たちの基本的権利および法的権利を認識していない、婚姻に関して多大なプレッシャーを感じている、社会の反応を恐れている、などです。ギャラップ・パキスタンが 2016 年に行った調査によると、国民の 65%が DV を個人的な家族の問題として捉えているということです。これに対し、DV を無くすためにメディアや社会組織が役割を果たすべきだと答えたのは、ほんの 35%にしか過ぎません。

この国の女性や少女たちは、職場や公共の場でもハラスメントを受けます。しかし職場でハラスメントを受けても、苦情を申し立てたりはしません。それは、自らの尊厳や名誉を守ることを優先させるからです。さらに、ハラスメントを受けた場合、それを証明する際の法律がきちんと整備されていないのも一因です。ハラスメントのケースに適用可能な現行法が十分ではないのです。そして女性がハラスメントの訴えを起こしたとしても、公正な裁きを得られるとは限りません。ハラスメントの加害者は、このような弱みにつけ込んでくるのです。最近の事例としては、芸能人のミーシャ・シャフィさんのケースが有名です。（ミーシャ・シャフィさんはパキスタンで成功した女優です。歌手で俳優のアリ・ザファールさんからセクハラを受けていたことを公表しました。これは保守的なパキスタンにおいて最初の #MeToo 運動として知られています。）

女性や少女たちは公共の場所でも不安感を抱き、自由に行動できません。例えば一人で移動する際、バス停でハラスメントを受けるのです。パキスタンの ラホールでは、通勤・通学中の女性の約 82%が、バス停でハラスメントを受けたことがあると答えています。

幼い女の子でさえ、一人で近所の公園に遊びに行ったり、お菓子屋さんに出かけたりはできません。もしそのようなことをすれば、誘拐され、レイプされ、残忍な形で殺害されかね

ないからです。ザイナブ・アンサリちゃんの事件はその一例です。（7歳のザイナブ・アンサリちゃんは自宅のすぐ近くでイスラム教の聖典コーランの朗読会に向かう途中で拉致され、虐待、強姦された上に殺害され、ゴミ集積場で遺体となって発見されました。ザイナブちゃん殺害に対する怒りはパキスタン全土に広がり、大きな抗議活動が行われました。）

女性を守るための法律はパキスタンにも存在するのですが、一番の問題はこの国の法体制です。さらに法体系にもいまだ多くの抜け穴があり、そのため法律の施行が不十分なのです。

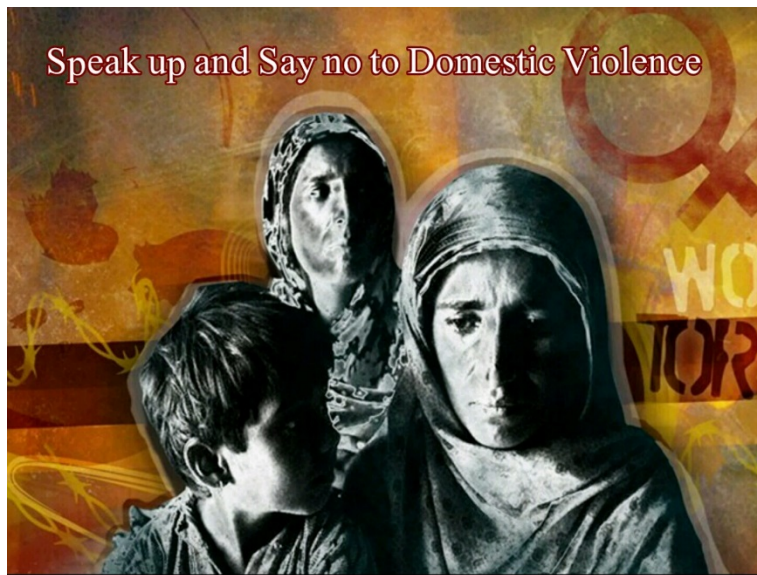
パキスタンは家父長制社会であり、そのことがジェンダー不平等を社会通念として助長しています。多民族国家であるパキスタンの社会は多面的です。しかしジェンダー平等の問題が提起されると、あらゆる民族、階級、宗派は男性優位という点で一致団結します。また、夫が無職で妻がその家庭の唯一の稼ぎ手であったとしても、夫は理由もなく妻に対して暴力をふるう権限があると考えています。同様に父親や兄は、家長は自分たちであるということ誇示するために娘や妹に対して虐待をします。このように、男性の方が優れているのだと幼少期から教え込まれるような社会の構造によって、男性が権力を持つようになるのです。

パキスタンにおいて、ジェンダー不平等こそが女性に対する暴力の根本原因です。そのため、国民に対してジェンダー平等に対する意識高揚を図らなければなりません。そうすることで、ステレオタイプ、固定化されたジェンダーロール、偏見などによる制限に縛られることなく、男女ともに自由な選択ができるようになるのです。

この国において、ジェンダー差別や女性に対する暴力に終止符を打つためには、行政、市民社会、民間セクターが連携して取り組まなくてはなりません。さらに、女性や少女たちが司法制度を利用できるよう、政府には法体系を実質的に機能させることが強く求められます。



名誉の名の下に殺すな



家庭内暴力に反対の声を上げよう



少女虐待を許すな

<https://www.hrw.org/world-report/2017/country-chapters/pakistan>

<https://asiancorrespondent.com/2018/03/ending-violence-against-women-in-pakistan/#rKJgcBKl8jcsL5bX.97>